

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

学際的な研究が学問の世界に閉じず、政治論争に至ってしまう背景には、主に次の二つの要因があります。第一に、まさにその分野が、社会の中にある複雑な課題を扱うことができていたために、学術コミュニティを超えて人々の関心をひきつけて、論争が誘発されやすくなります。

第二に、多くの人に関わるのに、そうした複雑な問題を扱う研究は、まさに複雑であるがゆえに、はっきりと物事に白黒を付ける答えは出せません。ゆえに、対立が継続してしまいます。これは、人文社会科学だけではなく、自然科学的な方法論が使われている場合でもさほど変わりません。

自然科学と社会の双方が関わる複雑な問題は、それが切迫した主題であるほど、自然科学をもつてしても、明確な答えがすぐに出せない場合が多いです。たとえば、公害による健康リスクのように、時間をかけて（あるいは人体実験により）検証すれば答えが出るかもしれないが、社会的にそれは困難であるというような場合があります。もしくは倫理的な問題のように、もともと科学では答えが求められない性質の問いを含んでいる場合もあります。クローン人間を造つてよいか、といった問題がその例です。

特に現実の社会問題が関わる場合、時間の問題は重要な要素です。たとえば地球温暖化の場合は、「予測の正しさが証明されたときには相当な犠牲者が出てしまう」というジレンマが存在します。そのため、研究が導く解答が確実だとは言い切れない状況でも、「どうするべきか」という意思決定に貢献することが期待されます。科学的に確定が困難な要素を含む問題だが、「今現在」社会的合意が必要となってしまうのです。

地球温暖化問題においては、問題が起きる前に手を打つ「予防原則」の立場から、気候変動枠組条約やCO₂削減といった様々な政策的措置が動きだしました。結果として、反対する人は「科学的な結論が不確定なうちに政治が動きだした」との印象を抱き、研究の不備や政治的偏向を主張したりして論争が続くことになったのです。

このような状況を否定的に捉えて、政治論争が起きるような学問はまともでない、政治的中立性がないとの結論に飛んでいく人もいます。あるいはその逆で、科学的な検証を行って出した答えに反対する人がいるなんて信じられない、理性的ではないと叩く人もいます。

^A私自身は、論争の存在自体を肯定的に捉える立場です。それも、一步踏み込んで、ある学問が人間社会に関わる切実な対象を扱うほどに、その学術的な論争と、政治的論争との間の境目が不明確になっていくのはやむをえないし、だからこそ論争が必要だと思っています。それは、人間の認識能力の不完全さと、対象の複雑さとが合わさったとき、何らかの政治性が生まれてしまうことは避けがたいと考えているからでもあります（なお私は、「政治的であること」と「党派的であること」を区別しています。前者は「市民生活においてどの価値を優先するか」ということ、後者は「誰の味方か」という人間関係的な側面のことです）。

問一 傍線部Aとあるが、筆者が「論争の存在自体を肯定的に捉える」のはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。理由

- ア 論争を通して対象に一步踏み込むことよって、学問を人間社会に関わる切実なものへと昇華することができるから。
- イ 複雑な問題を研究する際に何らかの政治性が生じることは避けがたく、論争を通して互いの意見を検討する必要があるから。
- ウ 市民生活においてどの価値を優先するかを、論争を通して決定していくことこそが、人間が社会で生きるということだから。
- エ ある主張が学術的か政治的かを一人で判断するのは困難であるが、多くの人々による論争によってその判断が可能になるから。
- オ 複雑な対象を扱う学問であるほど、政治的中立性を保つため、論争を通してさまざまな意見を交わさなければならぬから。

問二 本文の内容に合致するものを、次から一つ選べ。全体把握

- ア 確実に白黒を付けられる自然科学に関わる問題とは異なり、人文社会科学に関わる問題は明確な答えを出せない場合が多い。
- イ 現実の複雑な問題の解決について社会的合意を得るにはかなりの時間を要するため、一部の人だけで結論を出さざるを得ない。
- ウ 地球温暖化問題には、問題を予防するためには政治的偏向に目をつむらなければならないというジレンマが存在する。
- エ 現実の社会問題では、科学的に不確かな結果が意思決定の根拠となる場合があり、それが論争の続く要因となっている。
- オ 人間は複雑な問題を研究する際、完全な答えを用意することはできず、党派的な立場に偏ってしまうことが避けられない。

